

出土している。下佐野例は、器形的に口縁が直上する点、地文縄文を施文している点及び内外面赤彩（器内面獸胎附着）という点こそ異なるが、近似例として重要である。いずれにせよ、「吊す」機能を備えていたことが大きな特徴で、「ハレ（祭りなど）」に使用された器として捉えられる。

以上から、8-001の所属時期を、加曾利E 4式期と位置づけたい。埋壺やある種の炉体土器などによる時期決定ではないものの、少なくともこれを大きく遡る時期ではないと思われる。

最後に市内での中期末葉の集落調査例（報告例）を見てみたい。（仮称）神野・保品台では、支谷を挟んだ栗谷遺跡で、竪穴住居跡3軒、小竪穴1基が検出された。廃棄された土器を見ると、A015は条線を施文した個体のみなので保留するが、A011とA038を比較する限り、A011にキャリパー形深鉢が目立ち、浮線系・沈文系意匠充填系土器も少なからず出土している。対するA038では浮線系意匠充填系土器が少量出土する。そして、D011では浮線系意匠充填系土器の出土が目立つ。いずれにしても、横位連携弧線文土器は確認されておらず、条線文系土器は安定しているという特徴がある。これらは、加曾利E 3式（古）段階に位置づけられる。E 3式（新）段階では栗谷の台地を含め、各遺跡とも住居遺構が検出されていない。ただし、境堀では土器が出土しているの、人々の生活の痕跡が認められる。

この時期の良好な資料は、（仮称）麦丸・萱田台の長兵衛野南遺跡にある。ここでは、比較的接近して竪穴住居跡2軒が検出された。2軒には時間差が存在しており、覆土の遺物は加曾利E 3式（新）段階を主体とするが、報告者の森 竜哉は、覆土中の加曾利E 3式（古）段階及びE 4式土器の混入量の差から、遺構の埋没と廃棄の時間差を認めた上で、ライフ・サイクルを想定している（森2000）。

それは、02Dの設営・居住（遅れて01Dの設営・居住）→02D・01Dの居住（両者の共存）→02Dの廃絶・01Dの単独居住→01Dの廃絶というものである。この報文は近接し、かつ重複が認められない住居跡群の詳細な分析報告例としても様々な示唆に富む。土器としては01Dは浮線系意匠充填系土器が安定しており、横位連携弧線文土器を伴う。これは弧線文の単位化が進行しつつある点に注目し、E 3式（新）段階と見なしたい。02Dは沈文系意匠充填系土器及び横位連携弧線文土器が出土している。

最後に、今後を見据え、八千代市内における中期末葉の時間軸の定点を定めておきたい。それは、加曾利E 3式（古）段階→加曾利E 3式（新）段階→加曾利E 4式、というものである。無論、先述の長兵衛野南例にも明らかなように、同じ時間枠で括った中でも新旧は存在するわけで、将来的にさらに細別される可能性を有する。以下は各段階における位置づけである。

加曾利E 3式（古）段階・・・栗谷遺跡A011・A015・A038・D011

加曾利E 3式（新）段階・・・長兵衛野南遺跡01D・02D

加曾利E 4式・・・・・・・・・・境堀遺跡8-001

市内では、未報告例が多いものの、中期末葉の集落検出は比較的多い。今回は周辺遺跡との比較検討は行っていないため、考察とするにはあまりにも拙いが、寛恕を乞うものである。

参考文献

- 喜多圭介 1989 「長田雉子ヶ原遺跡・長田香花田遺跡」 財団法人印旛郡市文化財センター
加納 実 1994 「加曾利E 3・4式土器の系統分析 一配列・編年の前提作業として一」
『貝塚博物館紀要』第21号 千葉市立加曾利貝塚博物館
森 竜哉 2000 「長兵衛野南遺跡発掘調査報告書」 八千代市遺跡調査会
藤 茂美 2001 「千葉県八千代市栗谷遺跡（第1分冊）」 八千代市遺跡調査会
西山太郎 2003 「瓢箪型注口土器考」 『印旛郡市文化財センター研究紀要』3 財団法人印旛郡市文化財センター

4) 中期における内水面域漁労一土器片鏟の問題一

今回は遺構内外を含め、90点の土器片鏟が出土した。このうち、15点は8-001出土なので中期末業の所産であるが、他は中期前業阿玉台式期のものがほとんどである。法量及び重量分析は諸般の事情で割愛したが、重量にまとまりがある点などから見て、今回出土の多くは漁網鏟として使用していた可能性が高い。明治15年作成の迅速図を見ると、当時は神野貝塚をのせる支台のすぐ下付近まで印磨沼が広がっていたことがわかる。縄文時代中期において、古印磨湾の湾奥部である当地域は汽水域であったが、漁網鏟の存在を考慮すると、内水面域（小河川）における漁労活動の一端を垣間見ることができる。それは、春先の「ノッコミ（産卵で浅瀬の草の近くに群がる状態）」のフナ漁を主とした季節漁的なものではなかったか。まさに「一網打尽」の状況であったことは想像に難くないからである。

最後に、8-001に見られる前代の遺物の再利用であるが、阿玉台式期のものはほぼそのまま無加工で用いており、その使用目的に大きな変化がなかったことを示唆している。と同時に、再生された素材としての土器片の帰属する土器型式と、再生・使用した時期が異なる場合があるということを確認する必要がある。他方で、加曽利E3式土器片を再利用したものは、法量的に見ても大形であって、これのみ突出した観がある。やはり、漁網鏟とは別種の使用法（魚釣り用の沈子など）も考慮するべきである。

参考文献

- 小笠原永隆 1997 「八千代市神野貝塚採集の土器片鏟について」 『貝塚研究』第2号
園生貝塚研究会

第4項 後期

1) 後期初頭の評価

今回は調査区からはほとんど出土しなかったが、神野群集塚の3号塚封土及び封土下より、意匠内に縄文を充填するものを含め、網取系土器及び格子文系粗製土器がまとめて出土している。向境遺跡からは網取系土器を含め、意匠内に列点を充填するもの及び格子文系粗製土器が出土した。このうち、格子文系粗製土器は、胎土・焼成に至るまで、神野群集塚3号塚のものと同様である。そういう眼で両者を見ると、向境での出土地区はやや散漫ながら、神野群集塚3号塚の周辺に集中していることが判明した。少なくとも、両者の土器群を使用し、廃棄したのは同一の集団であった可能性が高い。他方で、網取系の注口付土器及び構形に近い深鉢の、胎土及び格子文の描き方などが、格子文系の粗製土器と類似点・共通点が多く、製作時のレベルはともかく、使用時及び廃棄時はかなり共時性を持っていたと見なしたい。向境・境堀両遺跡とも、小規模な集団による短期間の滞在（居住としても良いが）が認められており、廃棄された土器群に大きな時間差が存在するとは考えにくい。こうして見ると、3段階区分では称名寺式（新）段階、7段階区分での6段階におさまる資料群と考えられ、市内の定点資料と見なすことができる。また、対岸の印磨村トケ前遺跡でも、ほぼ同段階の資料が出土している。

参考文献

- 石井 寛 1992 「称名寺式土器の分類と変遷」 『調査研究集録』第9冊 財団法人 横浜市ふるさと歴史財団

第2節 弥生・古墳時代

第1項 弥生時代

境堀遺跡の弥生・古墳時代については、竪穴住居跡32軒、土坑3基が調査された。ここでは、弥生後期に該当するであろう竪穴住居跡22軒、土坑2基を中心に考察してみたい。

1) 出土遺物について

印旛沼周辺地域の弥生後期の土器の編年研究については、これまで混乱していたと言っても過言ではない状況が久しく続いていた。混乱に拍車をかけてしまった感もあるが、筆者も本シリーズの栗谷遺跡第3分冊及び向境遺跡において印旛沼南岸地域の土器の系統分類を行った(註1)。該期の土器について大別2系統、小別4類に系統分類を行い、若干の検討を試みた。以下、その概要を示すと、

(1) 印旛沼南岸の弥生時代後期土器の系統分類として

A類 複合口縁を作り、S字状結節文とは結びつかない系統(註2)。

A-1類 頸部有文(櫛描)のもの。

A-2類 頸部無文のもの

B類 輪積痕を有し、しばしばS字状結節文と結びつく系統。

B-1類 胴部有文のもの。

B-2類 胴部無文のもの。

(2) 2系統、4類の土器が、それぞれに2～3段階程度の変遷をしている。

(3) A類については、北・東関東、櫛描文系土器の影響が、B類については南関東系、特に白井南式の影響を受けている。

となる。ここでは、北関東系、白井南式、印手系等に表される既成の範疇に押し込めるのではなく出土状況に即した分析、検討をしてみたい。まづ、注目したいのが、6-001出土遺物である。1、2はともに床面直上遺物であり、両者の同時期性を知りうる資料と成るのではないだろうか。1は、南関東系の台付甕と考えられ、2は筆者がかつて分類したB-1類の土器になるかと思われる。輪積痕は既に有していないが、S字状結節文と結びつき、胴部有文(附加条縄文)であることから、そのように判断した。同様の出土例を示すものに、栗谷遺跡A155出土土器がある(註3)。尚、数例の共伴例を待たねばならないだろうが、図示した2種が同時期の所産である可能性は高いであろう。また、S字状結節文が本来南関東の宮ノ台期以来の壺形土器に施文されている文様(或いは文様帯区画の手法)であることを考慮すると、6-001-2は器種として甕とするより、広口壺とするべきという考えも持っている。持っはいるが、図示したB-1類の甕の原型として輪積痕がある土器を想定している現在、何故、輪積痕のある甕が広口壺に器種変更を起こすかのメカニズムを説明できないでいる。このことについては、現段階では保留としておきたい。広く類例を集め検討したい。

次に注目したい土器が7-009出土の7-009-1と7-009-5である。7-009-1は6-001-1同様、B-1類の土器である。また、7-009-5は櫛描の縦スリット間を櫛描の斜格子文で充填するタイプの土器である。S字状結節文と結び付いているが、B類の土器とのキメラ的な性格を有するもので全体的にはA-1類の土器となると判断した。隣接する向境遺跡、栗谷遺跡をとおして初めての出土となる。類例としては、佐倉市宇木八廣遺跡(註4)出土の土器が該当すると思われる。境堀遺跡における他の出土例には6-005-9がある。7-009-1と7-009-5とが覆土中の出土のため尚検討の余地が残るが、両者の間にそれほど時期差がないものと考えられる。次に7-009-5と同様の土器を出土している6-005の出土土器を見てみたい。6-005は、6-005-9とともに6-005-2、6-005-3の土器が出土している。これらは平底の壺形土器であるが、周辺遺跡での出

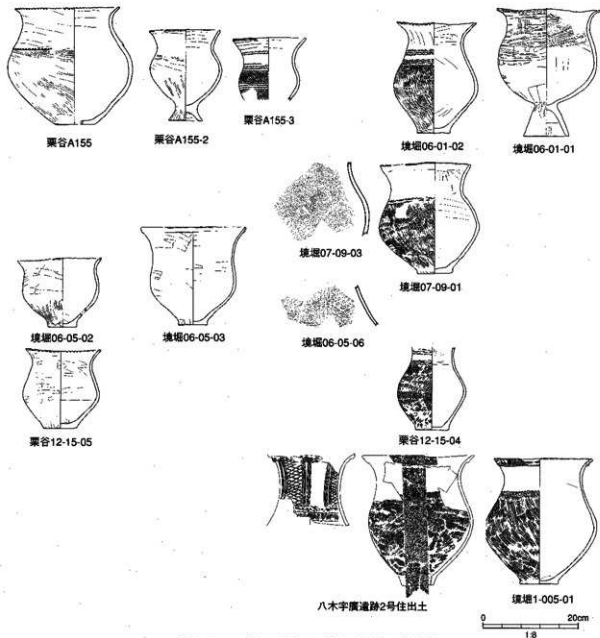


図 3-2-1 櫛ヶ台式から茅山下層式の変遷図

土例を見ると、栗谷遺跡A072が目目される。栗谷遺跡A072では台付甕の他に6-005-2、6-005-3と同様な平底の甕形土器が出土している。

以上の出土例からの検討から、6-001-1、6-001-2が同時期であるとともに、さらに栗谷遺跡A072の所見から7-009-5、6-005-9、9-005-2、6-005-3が同時期であることが導き出せるのではないだろうか。言い換えれば、これらの土器は全て、時期差として現れる土器ではなく、系統差として現れる土器と言えないだろうか。

境塚遺跡での検討を補う為、前述の佐倉市宇木八廣遺跡の出土土器を見てみたい。宇木八廣遺跡2号住出土遺物であるが、これまで検討した櫛播斜格子文の土器とともに出土している土器が、注目される。両者はともに床面直上遺物で同時期であると思われる（つまりは系統差のある土器）。境塚遺跡での出土例としては、1-005-1がある。このことから1-005-1と宇木八廣遺跡2号住出土遺物の同時期性も高いと言えないだろうか。

出土例に則して、同時期性の検討を行ってきた。次の問題は、それぞれの時期的な序列になるかと思う。栗谷遺跡の検討では、A類については櫛播文の退化の方向、B類については輪積痕の無段化の方向

	A-1類	A-2類	B-1類	B-2類	南関東系
I	<p>A057 A066</p>				
II	<p>A061 A080 A151 A043 A061 A043 八十字溝2号住 鉄線06-05-08</p>	<p>白山窯A002 A091 上管 A081</p>	<p>A063 A064 A001 A081</p>	<p>A060 A060 A060 A060 A015</p>	<p>A060 A060 A060 A060 A060 6 7 1 2 3</p>
III		<p>A072 A072 A033</p>	<p>A104 埴輪06-01-2 A033</p>	<p>A155 A072 A033 埴輪06-01-01</p>	<p>A033 A033 1 2</p>
IV			<p>A142</p>		

図 3-2-2 境塚遺跡周辺の弥生後期土器変遷図

性に着目して分析を行ってみた。前回までの検討では、差異が無いと思われる土器に時期差を設けていたり、複合口縁の有無に関して系統差を混乱していたりしていた部分も多々あったかと思われる。今回それらを多少是正しながら同じ着眼点で検討を加えてみた。同時に、久が原・弥生町式に代表される南関東の土器が共伴している場合は、それらも同時に掲載してみた。そして栗谷遺跡の報告以来行ってきた土器変遷図に今回の検討を加え、縦、横の序列を与えたものが図3-2-2になる(註5)。境堀遺跡を含む栗谷遺跡周辺遺跡での土器様相の変遷として、後期初頭(1段階)において櫛描文系土器(A-1類)が少なからず影響を及ぼしていたが、2段階以降、次第に輪積痕系土器(B類)がその主体を占めていくことが、その基本的な推移と思われる。この表を踏まえて境堀遺跡出土の土器を検討すると境堀遺跡出土の弥生土器は後期の2段階～3段階(特に3段階)にかけての時期に取まるかと思われる。

2) 集落の展開について

冒頭に述べたとおり、境堀遺跡の弥生集落は、竪穴住居跡22軒、土器棺墓2基が検出された。調査範囲に寄る要因が大きいが、集落は、調査区北側に位置する台地平坦面を中心に検出され、調査区東側の台地縁辺部で、3軒のみが検出された。台地平坦面の集落については弥生後期の単純な集落として検出され、縁辺部の集落は、古墳時代初頭の集落と混在する状況で検出された。集落の展開の典型を考えるならば、調査が及ばない台地先端にはさらなる展開が潜んでいる可能性がある(註6)。

1 形態・規模について

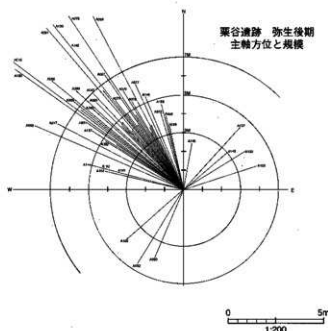
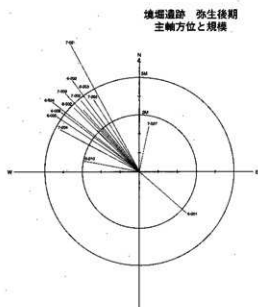
境堀遺跡弥生後期の竪穴住居跡の平面形態としては、小判形及び隅丸長方形のものが多く、規模については、長軸の長さが5m前後のものが平均的で、規模形態に関して、突出した大型住居等も無く、等質的な集落の印象を与える。調査区東側の住居跡群に付いては、若干時期が新しくなるせいか、隅丸方形の住居跡が散見される。

2 出土遺物からの検討

出土土器から境堀遺跡の集落を検討すると、調査区北側の平坦面で検出された集落は輪積痕を有し、しばしばS字結節文と結びつくタイプの土器(=B-1類の甕)を主体とし、それらに久が原・弥生町式に代表される南関東の土器が混在する状況が窺える。調査区東側の縁辺部の集落については、平坦面で検出された住居跡群より若干古い様相を呈する住居跡(1-005a)が検出されたが、その他は南関東系土器が混在する割合が高く、平坦面で検出された住居より若干新しくなると思われる。何れも対岸の台地に立地する栗谷遺跡と比較して、櫛描文系土器(A-1類)の影響が少ないことを特徴とすることができる。また、平坦面で検出された集落は、南関東の土器と積極的な共伴をすることが無く、各々の住居跡がB-1類の甕系統の土器、或いは南関東の土器として纏まりをもっている。栗谷遺跡の大型住居跡に見られたようなバラエティ豊かな器種構成は確認できなかった。紡錘車等の特殊な遺物が多く出土している住居跡等も少なく、出土遺物の構成上も等質的な集落の印象を与える。

3 周辺集落との比較

境堀遺跡の周辺の弥生後期の集落遺跡として、向境遺跡、役山東遺跡、栗谷遺跡などが挙げられる。検出された住居跡は、向境遺跡で1軒、役山東遺跡で3軒、栗谷遺跡で92軒を数える。向境、役山東両遺跡は集落として一部分の調査のため、詳細は不明である。ここでは、土器変遷から栗谷遺跡との比較を中心に集落の展開を考えたい。境堀遺跡の弥生集落は栗谷2期(註7)～3期、特に3期にその中心があることを先に述べたが、対して、栗谷遺跡は、栗谷1期から4期までの長い期間営まれた集落で、そのあり方は対照的である。住居跡の規模も、栗谷遺跡では、7mを越す大型住居が多数検出されているのに対し、境堀では検出されていない。栗谷遺跡と境堀遺跡とは、集落の規模、営まれた期間、突出した大型住居の有無、土器組成に様相においても対照的な状況を呈している(註8)。



	堅穴住居跡	大型住居	集落の期間	主体となる土器類型	備 考
栗谷遺跡	92軒	多数あり	1期～4期	A-1類～B-2類	時期ごとに主体となる土器類型に変遷有り
境塚遺跡	22軒	無し	2期～3期	B類主体	2期にA類出土
向境遺跡	1軒	無し	2期	B-1類	
役山東遺跡	3軒	無し	2期	A-2類	

図 3-2-3

3) 墓制について

最後になったが墓域について若干触れたい。境塚遺跡で検出された墓は壺棺墓が2基検出された。それぞれが堅穴住居跡群からやや離れた位置に造営されていた。出土した土器の形態からして再葬墓の可能性が高い。神野群集塚1号塚の盛土内からも、検出された2基の壺棺と同様の土器が出土していることから、本来3基以上が存在していたと思われる。それぞれが、単独の埋葬を行っていること、棺（蔵骨器）として壺ではなく壺を基本としていること、組み合わせ式の形態をとることを特徴としている（註9）。神野群集塚1号塚及び境塚6-012出土の壺棺は北・東関東的な附加条縄文を多様している。原体としては附加条縄文を使用しているものの、その文様構成において、肩部に羽状構成を用い、頸部に無紋帯を設けている。南関東的な手法と言える。また、境塚6-012に組み合っている壺にあたる壺はヘラミガキを調整の基調としていることなどから南関東的のものと考えられる。境塚6-011については、棺身、蓋とも南関東の壺である。これら3例を概観すると、南関東と東・北関東の土器との組み合わせを基本としながら、南関東的な要素が強い状況が窺える。

印旛沼周辺の地域性として南関東と北関東の混合地帯という性格が指摘されて久しいが、境塚遺跡周辺の地域性を墓制の面から更にマイクロレベルで検討した時、南関東の影響力がやや強い地域と言えるのではないだろうか。地域的な検討もさることながら、当然、時期的な検討も加えなくてはならない。神野群集塚1号塚及び境塚6-012出土の壺棺に使用された土器の類例（或いは同時期の）として佐倉市大崎台遺跡201号住居跡出土の壺形土器を考えている（註10）。全体の器形、文様構成からの判断である。そうした場合、これら壺棺とされる土器群は中期末～後期初頭の所産と考えられる。境塚6-011出土土器については前2者よりも幾分新しくなると思われる。境塚6-011出土土器の文様構成及び棺身、蓋の組み

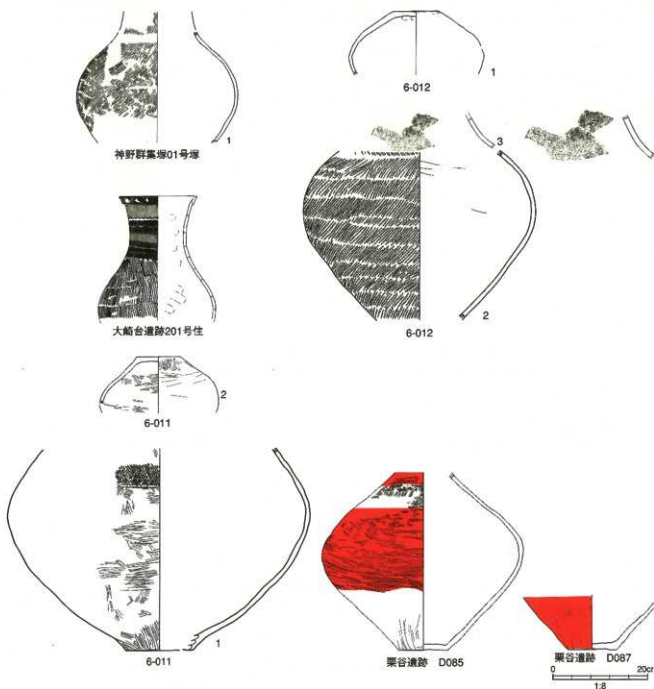


図 3-2-4

合わせが、前2者と比べ、より南関東的であること、より時期が新しくなること、これらの事柄は多くを示唆している。つまり、中期末～後期初頭に造営されたであろう前者2基の再葬墓については、北関東の影響を受けつつも南関東の影響が強い中で造営され、後者は、より時期が新しくなり、南関東の影響もより強くなるのである。以上が、境塚遺跡周辺の該期の地域的特性であり、時期的変遷ではないかと考えられる。

集落との関連を考えるとこれらの土器棺墓は、集落と同じ地区から検出され、竪穴住居跡群からやや離れて立地しているものの集落とは若干の時期差があり、墓城の方が先行していると思われる。1次埋葬施設や再葬墓造営者集団の集落は今回検出できなかったが、或いは未調査区域において検出される可能性が有る。

周辺遺跡として、栗谷遺跡から同様に壺棺墓の検出がある。栗谷遺跡の壺棺墓も境塚遺跡と同様で、

単葬を基本とし、壺棺を基調としている。時期は栗谷遺跡検出の壺棺墓の方がやや新しく、後期前半から後半の時期が与えられるかと思われ、南関東の土器を基調としている。この2点からすると、境堀6-011出土土器と時期、性格が近似していると思われる。何れにせよ両遺跡とも中期前半の再葬墓に見られる複数埋葬が見られず、壺棺を基調としていることから墓制の上で弥生文化と縄文文化の境界地域の状況を表しているかと思われる(註11)。これは、同時に該期の当地域における外来の弥生文化を担った南関東の文化と伝統的縄文文化を引き継ぐ北関東の文化の混合状態で、境堀遺跡周辺では混合地帯ではあるものの南関東の色彩が強く、時期を下るにつれ強さを増していったと考えられる。

また、栗谷遺跡においては、中期宮ノ台期の方形周溝墓が11基検出されている。境堀遺跡、栗谷遺跡におけるこうした壺棺再葬墓の変遷に重要な役割を果たしたのが、宮ノ台期の方形周溝墓であろう。宮ノ台文化の進出が墓制において複数埋葬から単独埋葬への変化を引き起こしたのではないだろうか(註12)。また、墓制のみならず、土器については、縄文の羽状構成や横走縄文帯、頸部無紋帯の発生などの文様構成上の変化を生み出したものと考えられる。このように考えたときに、境堀遺跡の壺棺再葬墓の特色とその変遷について理解が可能となる。ただし、これは、境堀遺跡とその周辺における数少ない類例からの見通し的な見解のため、立証には更なる類例の追加と、検討・分析の深化が必要である。中期前半～後期にかけての壺棺再葬墓の形態上の変遷と質的变化、方形周溝墓との関係、また、その背後に有る葬送儀礼や墓域造営にあたる集団関係、集団内関係の解明など新たに提起された課題も多い。

以上、整理を進める上で気づいたことを雑感的に述べてしまい、検討できていない課題も山積みであるが、何れにしても境堀遺跡を含めた近隣地域は、印旛沼南岸における弥生後期集落の密集地であることは言えよう。今後検討を続けていきたい。

註

- 1) 宮澤久史 2003 「栗谷遺跡—第3分冊—」 八千代市遺跡調査会
宮澤久史 2004 「向境遺跡」 八千代市遺跡調査会
- 2) A類については複合口縁を作る土器と作らない土器との間にさらに系統差を設けるべきかも知れない。今回、そこまでの検討に至らなかった。以下の文献が参考となった。
鈴木正博 1999 「栃木『先史土器』研究の課題(3) — 「宮ノ台式縁辺文化」としての「富士前式」制定とその意義 —」 『婆良岐考古』21
- 3) 覆土中の出土のため高検討の余地が残る。
- 4) 小谷龍司 1995 「宇木八廣遺跡発掘調査報告書」 財団法人印旛郡市文化財センター
- 5) 栗谷遺跡、向境遺跡の各報告の段階で常に若干の変更を行っている。今回の編年表は、前2遺跡に今回の境堀遺跡の検討を加え作成したものである。
- 6) 奈良・平安時代の竅穴住居I-007から出土している磨石は、宮ノ台期特有の太形鋸刃石斧の転用の可能性が高い。このことから、周辺地区、特に台地先端部に宮ノ台期の集落が存在し可能性も高いと考えている。
- 7) 但し、境堀遺跡の場合、栗谷遺跡とは違い台地の一部を調査したに過ぎない為、境堀遺跡の立地する台地全体を考慮にいれば、栗谷遺跡に匹敵する大集落になる可能性がある。また、栗谷遺跡は、集落変遷において、地点を変えて展開していた傾向があった為、境堀遺跡で調査された弥生集落も、全体の中で、そうした3段階に該当する地域を調査した可能性がある。

- 8) 栗谷遺跡、境堀遺跡の中心とした今回の編年試案(図3-2-2)を基に栗谷1期~4期と便宜的に区分し仮称した。以下、そのように記す。
- 9) 類例として、千葉県小見川町阿玉台北遺跡例、千葉県成田市タダメキ第2遺跡例、同県同市谷津掘遺跡例がある。
- 10) 高花宏行氏御教示による。
- 11) 再葬と言う現象面を捉えれば、複数埋葬と単独埋葬は、同じ墓制として括ることも出来るが、2次埋葬施設での両者の違いは、埋葬された故人の集団内での位置付けや、集団が立脚する生業基盤など、その背景に質的变化が伴っていると考えられる。よって、中期前半の佐倉市天神前遺跡などに見られる複数埋葬の再葬墓と、本遺跡で見られるような、中期末~後期前半の単独埋葬の再葬墓は区分して考えるべきであろう。以下の文献を参考とした。
- 岡本孝之 1995 「弥生時代墓制の地域区分」 『考古学研究』42-1
- 12) 再葬墓の衰退、消滅に方形周溝墓が関与していることについては、小林青樹氏の指摘がある。
- 小林青樹 2004 「弥生再葬墓に関わる集落と居住システム」 『考古学ジャーナル』524

参考文献(脚注で使用したもの以外)

- 矢戸三男ほか 1975 「阿玉台北遺跡」 財)千葉県都市公社
- 柿沼修平ほか 1986 「大崎台遺跡発掘調査報告書2」 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会
- 渡辺 新 1991 『縄文時代集落の人口構造』
- 酒井弘志ほか 2000 「千葉県成田市南羽鳥遺跡群4」 財団法人印旛郡市文化財センター
- 石川日出志ほか 2004 「考古学ジャーナルー「再葬墓」研究の現状と課題ー」524

第2項 古墳時代

1) 古墳時代前期の遺構と遺物

境堀遺跡の古墳時代は、前期の堅穴住居跡10軒と後期の堅穴住居跡1軒が調査された。ここでは、古墳時代前期に焦点をあて、調査された前期の遺構と遺物等の中で注目すべきものを取り上げ、資料提示と若干の所見を示したい。

まず、遺構であるが、古墳時代の堅穴住居跡の形態・規模に関しては、以前、本シリーズ『栗谷遺跡第2分冊』において若干行ったことが有るが、今回の境堀遺跡の堅穴住居跡の形態としては、隅丸方形或いは隅丸長方形の住居跡で、4本柱をきちんと作らないタイプの住居跡が殆どで、規模的にも突出した大型の住居跡は検出されなかった(註1)。そうした中で、栗谷、境堀遺跡を通して初めての例として貯蔵穴を2基有し、明確な柱穴を持たないタイプの住居跡が検出された。8-002と8-005がそれに該当する。ともに刷毛調整の台付甕を出土していることから古墳時代前期に位置づけた。また、8-005は裝飾壺の口縁部片も出土していることから、古墳時代前期でも初頭段階に位置づけられるだろう。2軒の住居跡は、さほどの時間差は無いと考えられる。集落内での役割、住居跡内の空間利用のあり方など、未検討の課題が多いが、類例を重ね、今後とも検討したい。

次に遺物として注目されるのが、1-010出土の土器群である。1と2は所謂、小型精製土器群とされる。埴と器台であるが、1の底部は明らかに平底を意識して作られ丸底ではない。同様に2は器受部と脚部の接合部に穿孔が無い。それぞれの典型例からすればやや違和感がある。それらが、恐らくはセット関係で出土している。他の共伴例としては、4、5、6等が挙げられる。4は、ヘラケズリ・ヘラナデ調整の台付甕で、5、6は網目状糸文を使用した裝飾壺である。裝飾壺とヘラケズリ・ヘラナデ調

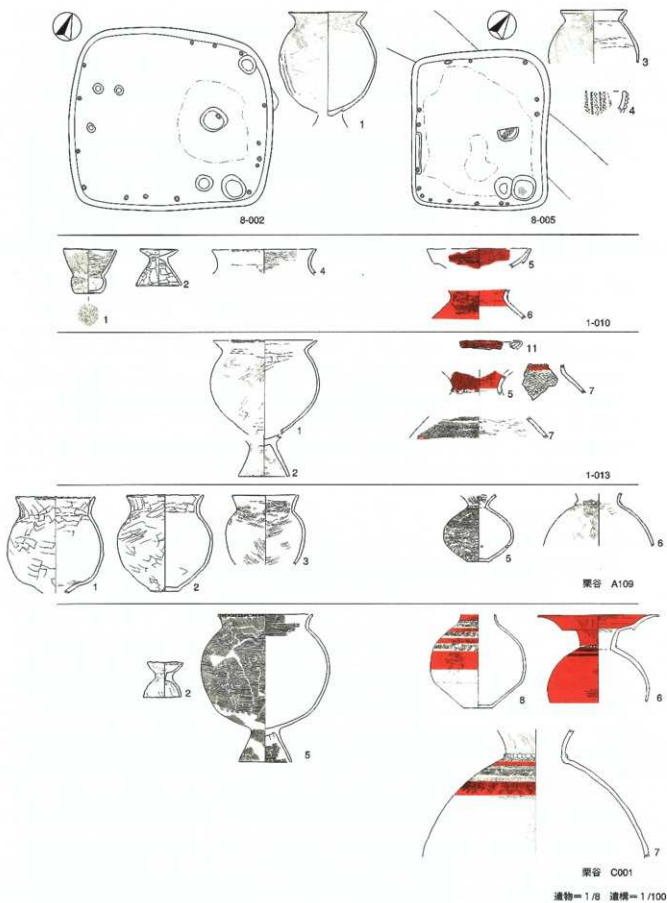


図3-2-5

整の台付壺の関係で同様の出土例を示す遺構としてI-013を挙げることができ、栗谷遺跡での類例を示せば、A109が該当する。このことから、本例1, 2は、裝飾壺（恐らくは網目状熱糸文の）とヘラケズリ・ヘラナデ調整の台付壺とのセット関係の中で現れる器種と思われる。その後、裝飾壺と刷毛調整の台付壺とのセット関係の中で小型丸底埴、小型器台等の小型精製土器群が出現する段階が来るのではないかとの見通しを立てている。古墳の造営時期などの関連で時代区分論等で議論を呼ぶ時期であるが、ここではこれらの土器を暫定的に弥生時代終末～古墳時代初頭段階と位置づけておきたい。

破片資料を含めると境塚遺跡において網目状熱糸文を使用する裝飾壺を出土する住居跡は多く、器台を出土する住居跡は少ない。対して栗谷遺跡の場合、器台を出土する住居跡は多いが、裝飾壺を出土する住居跡は少ない。栗谷遺跡では、集落について3期区分、そのうち裝飾壺の段階を2期に分けたが（註2）、境塚遺跡の例を加えると、台付壺の整形技法と小型精製土器群の変遷からも裝飾壺の段階を2段階に設定が可能になってくるとと思われる。そうしたことから、境塚遺跡の古墳時代前期集落も大まかに2期に区分できそうである。更に栗谷遺跡との比較検討をするならば境塚遺跡については、裝飾壺主体の時期から増埴、器台出現期までを、栗谷遺跡については、裝飾壺衰退期～埴、器台の盛行期にそれぞれの集落の中心時期が有ると考えられる。土器編年上の問題や祭祀形態の変更の意味など未解決な問題が多いが、今後、類例を重ね検討したい。

註

- 1) 栗谷遺跡の分類を援用するならば、明確な柱穴を持たない中型の住居跡と言うことで大きくはB類に属するとも言える。

宮澤久史 2003 「栗谷遺跡―第2分冊―」 八千代市遺跡調査会

- 2) 宮澤久史 2004 「栗谷遺跡―第3分冊―」 八千代市遺跡調査会

参考文献（脚注で使用したもの以外）

巖 成美 2001 「栗谷遺跡―第1分冊―」 八千代市遺跡調査会

宮澤久史 2004 「栗谷遺跡―第1分冊 本文編―」 八千代市遺跡調査会

第3節 奈良・平安時代

境堀遺跡の奈良・平安時代の調査では竪穴住居跡20軒、掘立柱建物跡18棟が検出された。集落としては、8世紀後半～9世紀前半の時期に集中している（註1）。

遺物の特徴としては、多量の墨書土器が出土していることである。破片資料を含めると、190点に及び、隣接の向境遺跡の240点と合わせると430点に及ぶ。また、墨書土器同様、鉄器及び鍛冶工房にかかわる輪刃口、碗形鉄宰等の出土にも挙げることができるだろう。

掘立柱建物跡と竪穴住居跡の関係は、竪穴住居跡が先行し、掘立柱建物跡が遅れて展開する状況が見受けられた。また、両者の構成比率であるが、周辺遺跡である栗谷遺跡では竪穴住居跡2～3軒に掘立柱建物跡が1棟程度の割合であったことと比較する境堀遺跡での掘立柱建物跡の構成比率が高い（註2）。そのあたりをやや詳しく見ていくと、

表3-3-1 栗谷、向境、境堀遺跡 竪穴・掘立柱建物数

栗谷遺跡	竪穴住居	掘立柱建物	向境遺跡	竪穴住居	掘立柱建物	境堀遺跡	竪穴住居	掘立柱建物
全体	55軒	13棟	全体	63軒	27棟	全体	20軒	18棟
A群	10軒	0棟	1群	17軒	0棟	1群	5軒	6棟
B群	17軒	6棟	2群	23軒	7棟	2群	2軒	1棟
C群	11軒	0棟	3群	17軒	18棟	3群	13軒	11棟
D群	16軒	7棟	4群	6軒	2棟			

となる。境堀遺跡第1群、第2群は、集落の一部を調査したに過ぎないので、考慮から外して考えると、各遺跡、各小群の掘立柱建物跡を含む集落は、竪穴住居跡2～3軒に掘立柱建物跡が1棟程度の割合であることが判る。そうした中で、境堀遺跡、向境遺跡での掘立柱建物跡の構成比率が高く、中でも、それぞれの第3群での比率が高いことが判る。境堀遺跡の第3群は、本来、隣接する向境遺跡の第3群と同じ集落であり、合わせて竪穴住居跡30軒、掘立柱建物跡29棟を一体の集落として検討する必要がある。時間的には、8世紀後半～9世紀前半の集落となり、掘立柱建物跡の重複関係等から2～3期の時期変遷が考えられる。墨書土器の出土も、それぞれの第3群での出土が多かった。しかしながら、今回、それらの詳細な検討まで至らなかった。こうした検討を進めるのにあたり、その基礎的な資料の一つとなる墨書土器の一覧を掲げ、奈良・平安時代の結びとしたい。

註

- 1) 遺物の年代観については、向境遺跡同様、下記文献を参考にした。
藤岡孝司 1992 「八千代市萱田遺跡群の歴史時代土器」 『研究連絡誌』30
財)千葉県文化財センター
- 2) 宮澤久史 2004 「栗谷遺跡-第3分冊-」 八千代市遺跡調査会
宮澤久史 2004 「向境遺跡」 八千代市遺跡調査会

表 3-3-2 規模遺跡出土文字資料一覽表

群	遺構・遺物番号	種別	釈文	器種	部位	方向	備考
1	1-004-1	線刻	「口」	土師器坏	底部内面		
2	1-004-2	墨書	「一」	土師器坏	底部外面		
3	1-004-4	墨書	「□□」	土師器坏	体部外面	正位	
4	1-004-6	墨書	「入□」	土師器坏	体部外面	正位	
5	1-004-9	墨書	「口」	土師器坏	体部外面		
6	1-004-13	墨書	「口」	土師器坏	底部外面		
7	1-004-16	墨書	「在」	土師器坏	底部外面		
8	1-004-23	墨書	「在」	土師器坏	体部外面	正位	
9	1-004-24	墨書	「在」	土師器坏	体部外面	正位	
10	1-004-25	墨書	「口」	土師器坏	体部外面		
11	1-004-26	墨書	「口」	土師器坏			
12	1-004-27	墨書	「口」	土師器坏			
13	1-004-28	墨書	「口」	土師器坏	体部外面		
14	1-004-29	刻書	「在」	土師器坏	体部外面	側位	
15	1-004-30	墨書	「口」	土師器坏	体部外面		
16	1-004-31	墨書	「囧」	土師器坏	体部外面		
17	1-004-32	墨書	「千」	土師器坏	体部外面	正位	
18	1-004-33	墨書	「大」	土師器坏	体部外面	正位	
19	1-004-34	墨書	「在」	土師器坏	体部外面	正位	
第 群	1-004-34	墨書	「在」	土師器坏			
	1-004-35	墨書	「在」	土師器坏	体部外面	正位	
	1-004-35	墨書	「在」	土師器坏			
21	1-004-36	墨書	「在」	土師器坏	体部外面	正位	
	1-004-36	墨書	「在」	土師器坏			
	1-004-36	墨書	「田」				
22	1-006-02	刻書	「田」	須恵器坏	体部外面		
23	1-007-03	墨書	「囧」	土師器坏	体部外面	横位	
24	1-007-04	墨書	「囧」	土師器坏	体部外面		
25	1-007-05	墨書	「囧」	土師器坏	底部外面		
26	1-005b-1	墨書	「口」	土師器坏	体部外面		
27	1-005b-2	墨書	「+」	土師器坏	体部外面		
	1-005b-2	墨書	「+」	土師器坏			
28	1-005b-3	墨書	「口」	土師器坏	体部外面		
	1-005b-3	墨書	「+」	土師器坏			
29	1-005b-4	墨書	「+」	土師器坏			
30	1-005b-10	墨書	「口」	土師器坏			
31	1-005b-11	墨書	「+」	土師器坏	体部外面		
32	1-005b-12	墨書	「口」	土師器坏			
33	1-012a-1	墨書	「囧」	土師器坏	体部外面		
34	1-012a-2	刻書	「□□」	土師器坏	底部外面		
35	1-012a-3	刻書	「口」	土師器坏	底部外面		

36	第2群	9-002-1	線刻	□	土師器坏	底部外面		
37		9-002-3	線刻	×	土師器坏	体部外面		
38		9-002-11	線刻	□	土師器坏	底部外面		
39		9-002-19	墨書	□	土師器坏	体部外面		
40		8-003-2	墨書	「」	土師器坏	体部外面		
42		8-003-6	墨書	「田」	土師器坏	体部外面		
43		8-003-9	墨書	□	土師器坏			
44		8-003-13	墨書	□	土師器坏			
45		8-003-21	墨書	□	土師器坏			
46		8-003-24	墨書	□	土師器坏	体部外面		
47		8-003-29	墨書	□	土師器坏	体部外面		
48		8-003-30	墨書	□	土師器坏	体部外面		
49		8-003-31	墨書	□	土師器坏	体部外面		
50		8-003-32	墨書	□	土師器坏	体部外面		
51		3-02-1	墨書	「人」	土師器坏	体部外面	逆位	
52		3-02-2	墨書	「人」	土師器坏	体部外面	正位	
53		3-02-5	墨書	□	土師器坏	体部外面		
54		3-02-20	墨書	「人」	土師器坏	体部外面		
55		3-02-21	墨書	□	土師器坏			
56		第3群	3-02-22	墨書	「」	土師器坏		
57	3-02-23		墨書	□	土師器坏	体部外面		
58	3-02-24		墨書	「」	土師器坏	体部外面		
59	3-02-25		墨書	「人」	土師器坏	体部外面		
60	3-02-26		墨書	「人」	土師器坏	体部外面		
61	3-02-27		墨書	「人」	土師器坏	体部外面		
62	3-02-28		墨書	「」	土師器坏	体部外面		
63	3-02-29		墨書	「人」	土師器坏			
64	3-02-30		墨書	□	土師器坏	体部外面		
65	3-02-31		墨書	「人」	土師器坏	体部外面		
66	3-02-32		墨書	□	土師器坏	体部外面		
67	3-02-33		墨書	□	土師器坏	体部外面		
68	3-02-34	墨書	「」	土師器坏	体部外面			
69	3-02-35	墨書	「田」	土師器坏	体部外面			
70	4-04-1	墨書	「人」	土師器坏	体部外面	正位		
71	4-04-2	墨書	□	土師器坏	体部外面			
	4-04-2	墨書	「人」	土師器坏	体部外面	正位		
72	4-04-3	墨書	□	土師器坏	体部外面			
73	4-04-4	墨書	□	土師器坏	底部外面			
74	4-04-10	墨書	□	土師器坏	体部外面			
75	4-04-11	墨書	□	土師器坏	体部外面			
76	4-04-12	墨書	□	土師器坏	体部外面			

77	4-04-13	墨書	「口」	土師器耳	底部外面		
78	4-04-14	墨書	「口」	土師器耳	外部外面		
79	4-04-15	墨書	「口」	土師器耳	底部外面		
80	4-04-16	墨書	「口」	土師器耳	底部外面		
81	4-04-17	墨書	「口」	土師器耳	底部外面		
82	4-04-18	墨書	「口」	土師器耳	底部外面		
83	4-04-19	墨書	「口」	土師器耳	底部外面		
84	4-04-20	墨書	「口」	土師器耳	外部外面		
85	4-04-21	墨書		土師器耳	外部外面		
86	4-04-22	墨書	「口」	土師器耳	外部外面		
87	4-04-23	墨書	「口」	土師器耳	底部外面		
88	4-04-24	墨書	「口」	土師器耳	外部外面		
89	4-04-25	墨書	「口」	土師器耳	底部外面		
90	4-04-26	墨書	「口」	土師器耳	外部外面		
91	4-04-27	墨書	「口」	土師器耳	外部外面		
92	4-04-28	墨書	「口」	土師器耳	外部外面		
93	3-005-4	墨書	「口」	土師器耳	外部外面		
94	3-01-6	墨書		土師器耳	外部外面	正位	
95	3-01-8	墨書		土師器耳	底部外面		
	3-01-8	墨書	「口」	土師器耳	外部外面		
96	3-01-13	綠書	「口」	土師器耳	底部外面		
97	3-01-25	墨書	「口」	土師器耳	外部外面		
98	3-01-26	墨書	「口」	土師器耳	外部外面		
99	3-01-27	墨書	「口」	土師器耳	外部外面		
100	4-01-06	墨書	「口」	土師器耳	外部外面		
101	4-01-07	墨書	「口」	土師器耳	外部外面		
102	5-08-2	綠刻	「口」	須惠器耳	外部外面		
103	5-08-04	綠刻?	「口」	須惠器耳	底部外面		
104	5-08-10	綠刻?	「人」	須惠器耳	底部外面		
105	5-08-12	墨書	「人」	土師器耳	外部外面		
106	5-08-13	墨書	「人」	土師器耳	外部外面		
107	5-08-14	墨書	「人」	土師器耳	外部外面		
108	5-08-15	墨書	「人」	土師器耳	外部外面		
109	5-08-17	墨書	「人」	土師器耳	外部外面		
110	5-002-1	墨書	「」	土師器耳	外部外面		
111	5-002-2	墨書	「」	土師器耳	外部外面		
112	1-01-13	墨書	「冫」	土師器耳	外部外面	正位	
113	1-01-14	墨書	「人」	土師器耳	外部外面		
114	1-01-15	墨書	「人」	土師器耳	外部外面	正位	
115	1-01-16	墨書	「+」	土師器耳	底部外面		
	1-01-16	墨書	「子」	土師器耳	底部外面		

116	1-02-2	墨香	「」	土師器坏	体部外面	正位	
117	1-02-3	墨香	「」	土師器坏	体部外面	正位	
118	1-03-2	線刻	□	須恵器坏	体部外面		
119	1-03-9	墨香	□	土師器高台付坏	底部外面		
120	1-03-10	線刻	□	土師器坏	底部外面		
121	8-010-2	墨香	「人」	土師器坏	体部外面		
122	8-010-3	墨香	「人」	土師器坏	体部外面		
123	8-010-4	墨香	□	土師器坏	体部外面		
124	8-010-7	墨香	□	土師器坏	体部外面		
125	8-010-8	墨香	□	土師器坏	体部外面		
126	8-010-9	墨香	□	土師器坏	体部外面		
127	8-010-11	墨香	「人」	土師器坏	体部外面		
128	8-010-12	墨香		土師器坏	体部外面		
129	8-010-13	墨香	「人」	土師器坏	体部外面		
130	8-010-14	墨香	「人」	土師器坏	体部外面		
131	8-010-16	墨香	□	土師器坏	体部外面		
132	8-010-23	墨香	「人」	土師器坏	体部外面		
133	8-008-3	墨香	□	土師器坏	体部外面		
134	8-008-4	墨香	「」	土師器坏	体部外面		
135	4-02-4	墨香	□	土師器坏	体部外面		
136	4-02-5	墨香	「」	土師器坏	体部外面		
137	D5-55-3G NO1	陶香	□	土師器坏	底部外面		
138	D5-66-1G NO3	墨香	□	土師器坏	体部外面		
139	D5-78-3G NO4	墨香	「人」	土師器坏	体部外面		
140	D5-46-4G NO1	墨香	□	土師器坏	体部外面		
141	D5-55-3G NO2	墨香	□	土師器坏	体部外面		
142	D5-66G NO3	墨香	□	土師器坏	体部外面		
143	D5-66G NO4	墨香	□	土師器坏	体部外面		
144	D5-67G-4G NO5	墨香	□	土師器坏	体部外面		
145	D5-67G NO6	墨香	□	土師器坏	体部外面		
146	D5-67G-4G NO7	墨香	□	土師器坏	底部外面		
147	D5-68G NO8	墨香	□	土師器坏	体部外面		
148	D5-68-3G NO9	墨香	□	土師器坏	体部外面		
149	D5-75-2G NO10	墨香	□	土師器坏	体部外面		
150	D5-76-1G NO11	墨香	「在」	土師器坏	体部外面		
151	D5-76-1G NO12	墨香	□	土師器坏	体部外面		
152	D5-76-1G NO13	墨香	□	土師器坏	体部外面		
153	D5-77G NO14	墨香	□	土師器坏	体部外面		
154	D5-77-1G NO15	墨香	□	土師器坏	体部外面		
155	D5-77G NO16	墨香	□	土師器坏	体部外面		

第3群

遺物外

156		D5-78-1G NO17	墨書	「□」	土師器坏	体部外面	
157		D5-78-1G NO18	墨書	「□」	土師器坏	体部外面	
158		D5-85-3G NO19	墨書	「□」	土師器坏	体部外面	
159		D7-85-1G NO20	墨書	「□」	土師器坏	体部外面	
160		D7-85-1G NO21	墨書	「□」	土師器坏	体部外面	
161		D5-88-2G NO22	墨書	「□」	土師器坏	体部外面	
162		D5-88-1G NO23	墨書	「□」	土師器坏	体部外面	
163		D5-88-2G NO24	墨書	「□□」	土師器坏	体部外面	
164		D5-88-2G NO25	墨書	「□」	土師器坏	体部外面	
165		D5-88-2G NO26	墨書	「人」	土師器坏	体部外面	
166	道 橋 外	D5-88-4G NO27	墨書	「□」	土師器坏	体部外面	
167		D5-88-2G NO28	墨書	「□」	土師器坏	体部外面	
168		D5-88-2G NO29	墨書	「□」	土師器坏	体部外面	
169		D5-88-2G NO30	墨書	「□」	土師器坏	体部外面	
170		D5-88-4G NO31	墨書	「□」	土師器坏	体部外面	
171		D5-88G NO32	墨書	「□」	土師器坏	体部外面	
172		D5-88G NO33	墨書	「□」	土師器坏	体部外面	
173		D5-88G NO34	墨書	「□」	土師器坏	体部外面	
174		D5-88G NO35	墨書	「□」	土師器坏	体部外面	
175		D5-89-1G NO36	墨書	「□」	土師器坏	体部外面	
176	D5-97-3G NO37	墨書	「□」	土師器坏	体部外面		
177	D5-98-2G NO38	墨書	「□」	土師器坏	体部外面		
178	D5-98G NO39	墨書	「□」	土師器坏	体部外面		
179	D6-6G NO40	墨書	「□」	土師器坏	体部外面		
180	D6-18-3G NO41	墨書	「□」	土師器高台付坏	底部外面		
181	D6-97-2G NO42	墨書	「人」	土師器坏	底部外面		
182	D7-64-1G NO43	墨書	「寺」	土師器坏	底部外面		
183	D5-88-2G NO44	朱書	「□」	土師器坏	体部外面		
184	D5-98-2G NO45	朱書	「□」	土師器坏	体部外面		
185	D5-57G NO46	朱書	「ノ」	土師器坏	底部外面		
186	D5-67-3G NO47	朱書	「×」	土師器坏	底部外面		
187	D7-73-4G NO48	朱書	「×」	須惠器高台付坏	底部外面		
188	D5-77-1G NO49	朱書	「力」	須惠器坏	底部外面		
189	8-001-10 NO50	朱書	「×」	土師器高台付坏	底部外面		
190	8-001-10 NO50	朱書	「×」	土師器高台付坏	底部外面		

第4章 向境遺跡 補遺

以下に掲載する遺構は、本来向境遺跡の本報告において報告すべき遺構であったが、整理作業時の不手際により、掲載漏れとなってしまった。ここに補遺として報告したい。

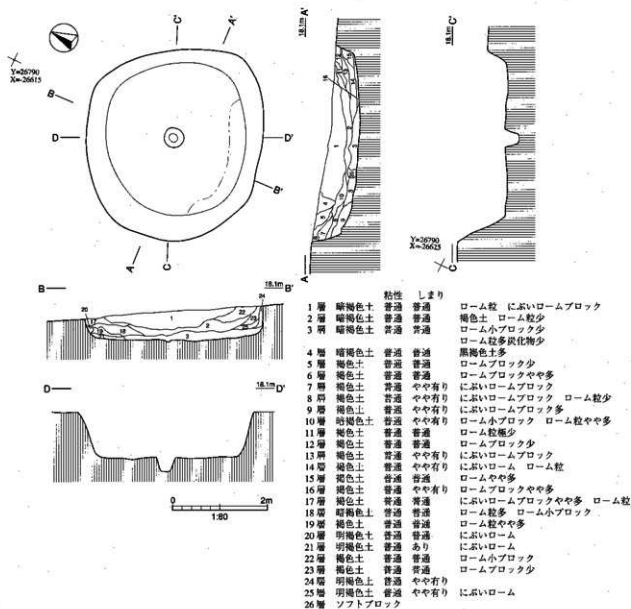


図4-1-1 2-004

向境遺跡 2-004

検出地区 E5-92G。台地先端の斜面部に立地する。

遺構 不整形の遺構である。床はロームを良く踏み固めた床で、硬化面が広範囲に広がる。壁はロームの壁で、やや、斜めに立ち上がっていた。底面中央に小穴1基を検出。その他の付属施設は検出されなかった。

覆土は、色調を基本に26層に分層した。概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から小破片を中心に少量出土した。

所見 時期決定出来る遺物の出土はなかったが、遺構の形態・規模等から縄文時代中期の小竪穴と考えられる。

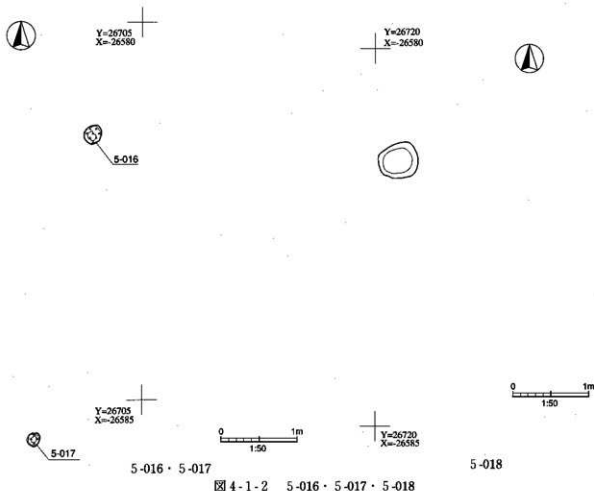


図 4-1-2 5-016・5-017・5-018

向境遺跡5-016

検出地区 E5-〇G。台地先端の斜面部に立地する。周辺の遺構として5-017がある。

遺 構 楕円形の小型土坑である。坑底は平坦で、斜めに立ち上がる。

覆土は、暗褐色土系の覆土が充填され、多量の貝が出土した。

遺 物 覆土中から貝以外の遺物の出土は無かった。

所 見 時期決定出来る遺物の出土が無いが、或いは、縄文時代の土坑か。

向境遺跡5-017

検出地区 E5-〇G。台地先端の斜面部に立地する。周辺の遺構として5-016がある。

遺 構 楕円形の小型土坑である。坑底は平坦で、斜めに立ち上がる。

覆土は、暗褐色土系の覆土が充填され、多量の貝が出土した。

遺 物 覆土中から貝以外の遺物の出土は無かった。

所 見 5-016同様、時期決定出来る遺物の出土が無いが、或いは、縄文時代の土坑か。

向境遺跡5-018

検出地区 E5-〇G。台地先端の斜面部に立地する。周辺の遺構として5-016、5-017がある。

遺 構 楕円形の小型で浅いくぼみ状の土坑である。坑底は平坦で、斜めに立ち上がる。

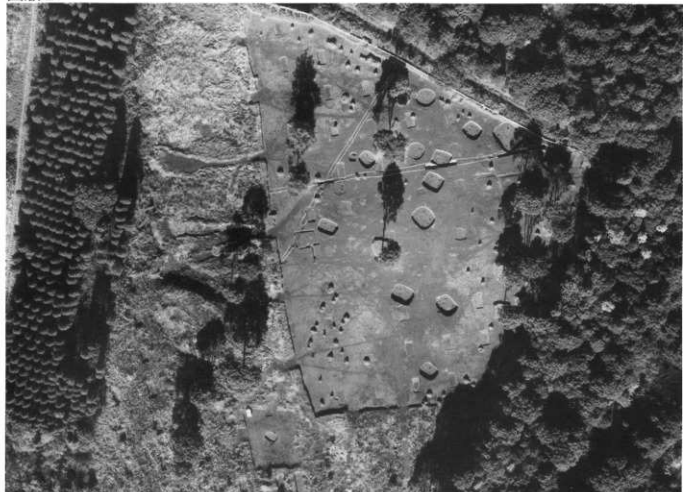
覆土は、暗褐色土系の覆土で、多量の粘土、焼土が混ざる。が充填され、

遺 物 覆土中から奈良・平安時代土師器の甕形土器胴部が出土。

所 見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。用途は不明である。



完掘全景



完掘全景



遺構検出状況



遺構検出状況



完掘全景



完掘全景



遺構検出状況



8-1



8-1



8-1



8-1



8-1



8-1



8-1



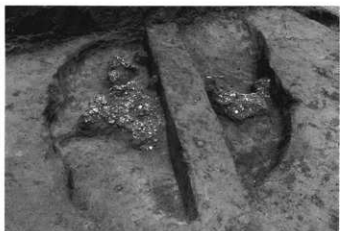
9-15



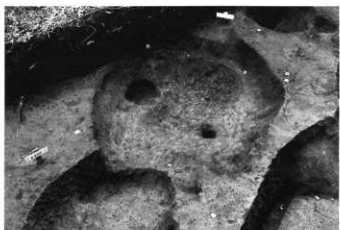
9-15



1-15



1-29



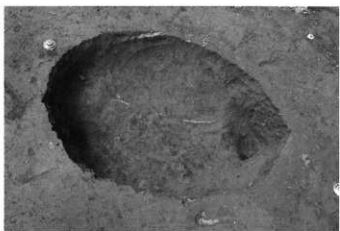
1-29



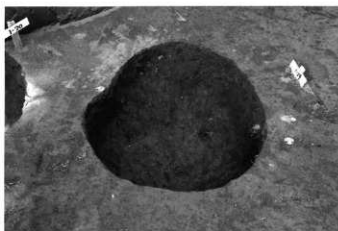
1-37



1-51



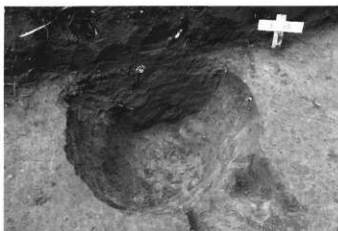
1-17



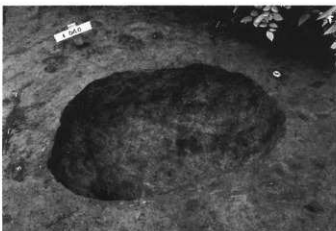
1-19



1-20



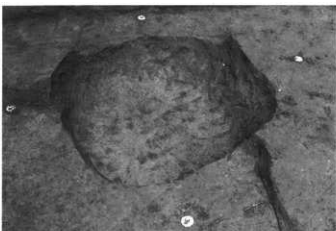
1-30



1-40



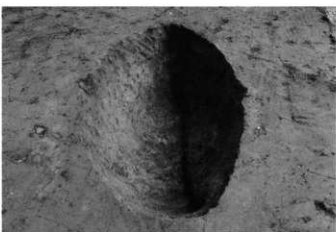
1-42



1-45



1-46



1-47



9-10



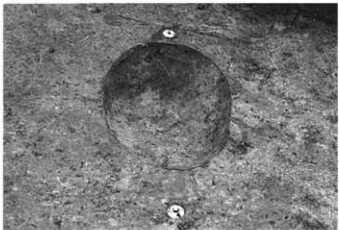
9-11



9-12



9-13



9-14



9-16



9-16



9-16



6-1



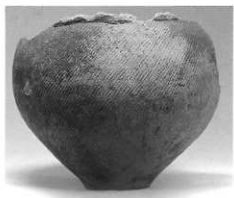
6-1



6-1



6-1



6-1



6-5



6-5



6-5



6-2



6-3



6-4



6-8



6-9



7-1



7-2



7-6



7-4



7-3



7-5



6-6



6-10



7-7



9-1



1-5a



1-5a



1-5a



1-5a



1-11



1-15



1-10



1-10



1-9



1-9



5-3



5-3



4-5



8-2



8-2



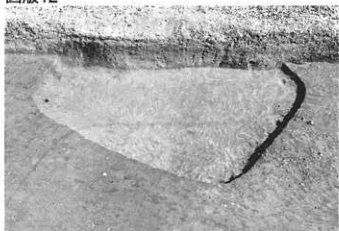
8-2



8-5



8-5



8-6



8-6



1-14



1-14



1-28



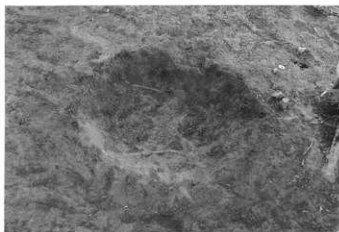
1-28



6-11



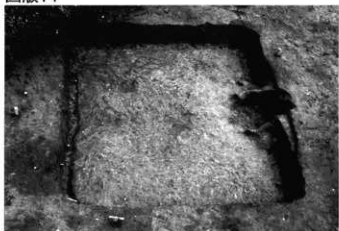
6-11



6-12



6-12



1-4



1-4



1-6



1-6



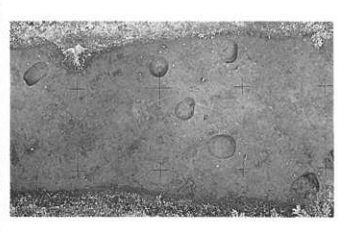
1-7



1-7



1-12a



1102



1105



1-4



1-4



1-4



1-4



1-4



1-4



1-4



1-4



1-4



1-4



1-4



1-4



1-4



9-2



9-2



B107 9-19-22



9-2



9-2



9-2



9-2

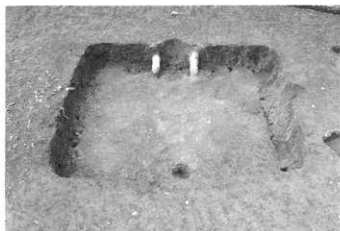


9-2



9-2





8-3



8-3



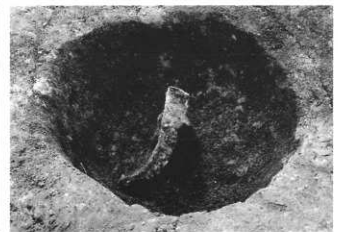
8-3



8-4



3-2



3-2



4-4



4-4



4-4



4-4



3-1



4-1



5-7



5-7



5-8



5-2



1-1



1-1



1-2



1-2



1-3



1-3



8-16-4 B108



8-16 B108



8-10



8-10a B109a



B109b 8-10B



8-10c B109c



B110 8-9



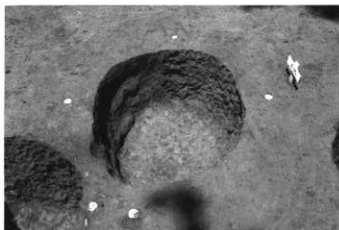
8-8 B111



B112 8-7



8-19



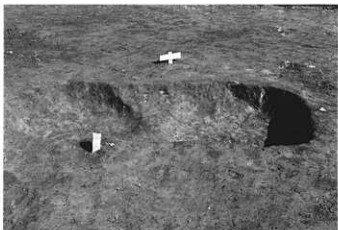
1-25



8-12



8-12



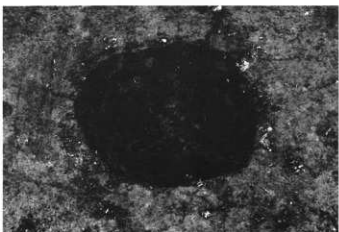
8-13



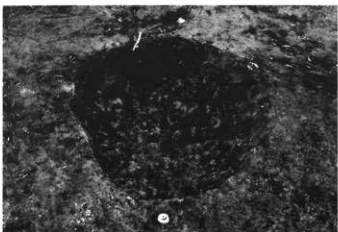
8-15



8-20



8-20



8-17



8-18



8-3



8-3



8-3



8-3



8-3



8-3



8-3



8-3



8-3



8-3



8-3



8-3



1号塚



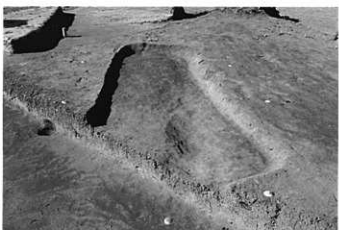
2号塚



3号塚



3号塚



3号塚



4号塚



5号塚



6-13



8-11



1-35



6-7



グリッド遺物 撚糸紋土器

報告書抄録

ふりがな	ちばげんやちよしさかいほりいせき(かしょう) やちよカルチャータウンかいほつじぎょう まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょⅣ
書名	千葉県八千代市境廻遺跡(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連歴史文化財調査報告書Ⅳ
編集者名	宮澤 久史
編集機関	八千代市遺跡調査会
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2 (八千代市教育委員会生涯学習部生涯学習課内) TEL 047-483-1151
発行年月日	西暦2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さかいほり 境廻遺跡	ちよよしかのあざかつだい 八千代市神野字谷津台1105外	12221	73	35度 45分 38秒	140度 7分 47秒	19921022~ 19930820 19940809~ 19941028 19941114~ 19951205 19960105~ 19960220 19960120~ 19960321 19971219~ 19980127	2,260㎡ 1,016㎡ 16,000㎡ 5,100㎡/	大字建設 住宅地造成
							174㎡ 1,570㎡ 1,286㎡ 230㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
境廻遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 2軒 炉 穴 5基 土坑 16基	縄文土器、石器	
	集落跡	弥生・古墳時代	竪穴住居跡 24軒 土坑 3基	弥生土器、古墳時代土師器 土製品	
	集落跡	奈良・平安時代	竪穴住居跡 20軒 掘立柱建物跡 18棟 土坑 14基 その他の遺構 6基	奈良・平安時代土師器、須恵器 土製品、石製品、鉄製品	
	包蔵地	中・近世	塚 5基 土塁 4条 溝 9条 土坑 4基 その他の遺構 1基	縄文土器、弥生土器 奈良・平安時代土師器、須恵器 土製品、石製品、鉄製品 古銭、鉄砲玉	

千葉県八千代市

境 堀 遺 跡

(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

2005年3月31日発行

編 集 八千代市遺跡調査会
千葉県八千代市大和田138-2
(八千代市教育委員会生涯学習部生涯学習課内)

発 行 大成建設株式会社
東京都新宿区西新宿1-25-1
